

## 川端康成の作品に見る建築空間

○正会員 鈴木 雄一郎<sup>\*1</sup>  
同 張 奕文<sup>\*2</sup>  
同 近藤 正一<sup>\*3</sup>  
同 若山 滋<sup>\*4</sup>

【序論】1968年にノーベル賞を授賞した川端康成は、大正・昭和という日本が急激に変化した時代に生きた我国を代表する文学者であり、その文筆活動において日本が進歩と引換に失いつつあった日本の伝統的な美を追求してきた。本研究では、川端康成の代表的な4作品を取り上げ、そこに現われる建築と都市空間を分析し、日本の美に関する感性の典型を通して、近現代日本人の空間意識を明らかにすることを目的とする。

【研究対象・方法】川端康成の代表的な作品である戦前の『伊豆の踊子』『雪国』と戦後の『古都』『山の音』を研究対象とし、以下の考察を行う。1) 作品の中に出現する建築・都市空間に関する用語を建築用語として抽出し、建物、部屋、部位、建具・部材、家具、庭、都市施設、地名、国名、交通機関、その他に分類して、それらの頻度と傾向について考察する。2) 作品の舞台となる空間の文章量(文字数)を作者及び読者の意識時間として集計し、舞台推移とその意識特徴を考察する。3) 建築と都市に関する空間表現を抽出し、作者の空間意識を考察する。

【建築用語の頻度】建築用語の分類別構成比(図-1)を見ると、頻度の高い用語は建物、部屋、家具、地名である。また抽出された建築用語の4作品合計のうち頻度の高いものを示す表-2を見ると、建物では「家」「うち」が多く、だいたいにおいて古くて静かな建物を描いている。部屋では「茶の間」「座敷」、縁側と兼用になった「廊下」など日本の伝統的なプランを描いており、逆に「応接間」などの西洋間はほとんど現れない。交通機関はどの作品でも主人公にとっての<日常>と<非日常>を結ぶ橋渡しとして使われている。彼の描く主人公達の<日常>とは、川端自身もそうであるが、ある社会的地位を持つ人々の身近な生活空間であるのに対して、その<非日常>とは、常に貧しい所、時代に取り残されたより日本的な所である。地名でも、日本的でそし

表-1 川端康成年譜

年代	歳	川端康成	社会一般
1899		大阪で生まれる	
1914	15	肉親を全て失う	第一次世界大戦 (-1918)
1917	18	第一高等学校入学	
1920	21	東京帝国大学文学部入学	
1921	22	*「招魂祭一景」	
1923			関東大震災
1924	25	東京帝国大学卒業	
1925	26	*「十六歳の日記」	
1926	27	*「伊豆の踊子」	
1929	30	*「浅草紅団」	
1931	32	*「水晶幻想」	満州事変
1933	34	*「禽獣」「末期の眼」	日本国際連盟脱退
1935	36	*「雪国」	
1937	38	*「雪国」刊行	日華事変
1941			太平洋戦争 (-1945)
1946	47	鎌倉へ引っ越し *「あとがき(濁影自命)」	
1949	50	*「千羽鶴」「山の音」	
1951	52	*「舞姫」「名人」	
1952	53	*「千羽鶴」刊行	
1954	55	睡眠薬の使用が多くなる *「山の音」刊行	
1961	62	*「古都」「眠れる美女」	
1964	65	*「片腕」	東京オリンピック
1968	69	ノーベル文学賞授賞	
1971	72	ガス自殺	

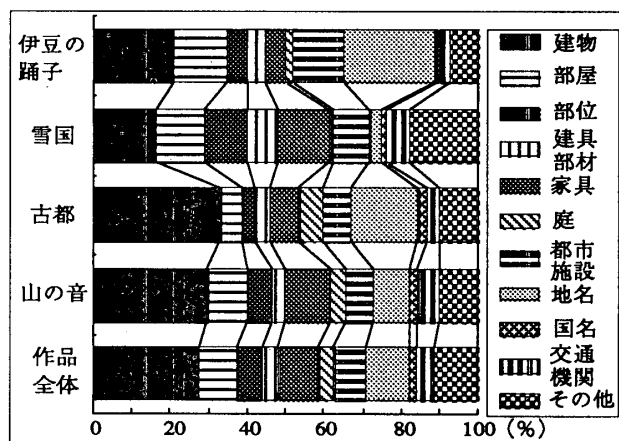


図-1 建築用語の分類別構成比

表-2 頻度の高い建築用語

建物	回数	部屋	回数	部位	回数	建具・部材	回数	家具	回数	庭	回数	都市施設	回数	地名	回数	国名	回数	交通機関	回数	その他	回数
家	215	部屋	91	窓	71	畳	21	鏡	43	庭	70	道	38	東京	61	アメリカ	17	電車	51	村	62
うち	175	廊下	47	屋根	33	雨戸	19	電話	40	池	23	駅	27	京	30	日本	16	汽車	41	町	42
店	138	座敷	40	門	26	襖	13	寝床	29	灯籠	8	植物園	21	嵯峨	22	西洋	7	車	33	奥	39
会社	63	台所	33	壁	22	格子	13	机	28	境内	6	街道	16	京都	22	朝鮮	5	バス	11	二階	31
宿	51	玄関	29	軒	17	障子	12	枕	26	飛び石	6	橋	15	鎌倉	19	外国	5	横須賀線	8	田舎	25

Architectural space in Yasunari Kawabata's works

SUZUKI Yuichiroh, ZHANG Yiwen, KONDO Shoichi, WAKAYAMA Shigeru

